

何ができるか」という考えに変わりつつあるそうで、各種事業がバランスよく整備されることが地域で安心して暮らせる『セーフティネット』であり、今後も本人・家族の状況に応じた事業展開をしていきたいとのこと。また、「事業所の職員さんが地域住民としてその地域にどれだけ多く関わっているかが重要であり、出会いがトラブルであっても積み重ねていくことで地域とつながっていける」と話されました。

午後の提言者の香川県立川部みどり園の村上昭史氏からは、本人・家族への丁寧な説明と意思確認、順を追って訓練を積み重ねることで地域移行を実現している例を発表されました。

湘南福祉センターの牧野賢一氏からは、軽度の人達のグループホーム『下宿屋』を運営されていて、地域で安心して暮らすためには福祉サービスの充実とともに地域との交流が不可欠であり、福祉コミュニティの拠点づくりに貢献していきたいとお考えです。

上越市「りとるらいふ」の片桐公彦氏からは、新潟県で実践されている24時間365日対応の『安心コールセンター』について、また、地域の拠点としての課題や構想について説明がありました。

迫りくる老障介護、2050年のさらなる少子高齢化を視野に入れ、暮らしの安心・安全を維持するための施設の地域化・多様化をいかに進めるか、バックアップ機能はどこがどのように担うのかについて、ホールも一体になって考えた分科会でした。

第12回 全国障害者スポーツ大会に
大阪市選手団の役員を派遣しました

第12回全国障害者スポーツ大会が10月13日

から10月15日まで岐阜県で開催され、育成会からは大阪市選手団の役員として泉原総



務部長を副監督として、茶谷 大彦(西区事業所)を陸上コーチとして、阪田麻美(港第二育成園)をボウリングコーチとして派遣しました。

陸上のコーチとして参加して

西区事業所 茶谷 大彦

今年は岐阜県で第12回全国障害者スポーツ大会

が開催され、私は陸上コーチとして参加しました。個人としては、全国障害者スポーツ大会に統合される前の全国的障害者スポーツ大会(ゆうあいピック)に、14年前に陸上コーチとして参加したことがありましたが、3障害が統合になってからの全国大会は初めての参加となりました。

関係者との初顔合わせをした際には、見知らぬ顔ぶればかりで、選手たちの中には名前は聞いたことがありましたが、実際に関わったことがなく、短期間でどのようにコミュニケーションを図っていけばよいのか正直不安でした。しかし、他のコーチの皆様方や選手の皆様が暖かく迎え入れてくれたことで、聴覚や視覚の選手とのコミュニケーションの際に戸惑っていると、間に入りサポートしてくれるなど。徐々に溶け込むことが出来たことは、とても嬉しく感じました。また、選手間でも食事や移動の際に物理的に困ったことがあると、お互いに気付き助け合おうとする姿勢に驚かされました。その時に年齢や障害種別を問わず人を思いやれる良い雰囲気ของทีมだと感じました。

また、岐阜県の学生ボランティアの皆様とも積極的に関わろうとする選手の姿もあり、いつの間にか良好な関係が築き上がり、選手との日々の会話、試合に出場する前の緊張感、日が経つに連れ笑ったり、泣いたりを共に分かち合うことが出来るようになりました。ボランティアの方も大会期間中に心を打たれ、別れ際や感想を述べてもらった際には涙を流す方も多くいました。

結果としても金メダル10個、銀メダルと銅メダルが8個ずつ獲得し、陸上チームはメダルラッシュとなりました。下は17歳から上は63歳と幅広い選手がこの大会に参加されましたが、チームが1帯となった大会でした。

スポーツには、スポーツをする人の健康や体力を維持・増進するだけでなく見る人の心にも勇気をもたらす、気持ちを前向きにする力があるといいますが、ただメダルや勝ち負けに囚われず、それぞれの人がそれぞれの目的にあった形でスポーツを楽しめる人が増えていけばと思います。大阪市育成会からも数名この大会に参加され、とても満足そうに戻ってこられたのがとても印象的でした。

大会に参加するには予選会に勝ち抜いていかなければならない難しさはありますが、一度参加されてみるのも如何でしょうか?勝ち負けにかかわらず、スポーツを楽しむところから新たな余暇に繋がっていけばと願っています。